みなみっ子

89号

令和８年 11 月 25 日（水）
南城市立大里南小学校
文責　校長　與儀　毅

学校教育目標　　自立　　協働　　創造

不登校や登校しぶりについて考える!!

近年の学校教育での大きな課題に、不登校や登校しぶりがあります。全国的にも急増していて、沖縄県に置いてはより深刻な状況にあります。私たち学校でも、不登校や登校しぶりの課題はあります。しかしながら令和6年度と比較して令和7年度は半減近く減少しています。また、令和8年度は、減少している昨年度と比較して、更に減少傾向にあります。

学校では、誰一人残さない、主体的・対話的で深い学びを目指した授業を改善し、特別活動でも一人一人の良さが発揮されるような係活動などを実践し、さらに、6年生の委員会活動で、児童が主体となって取り組む行事を実践しています。そのような取り組みが不登校や登校しぶりの改善につながっていると思います。

その様な状況においても、不登校・登校しぶりはいます。その中で最近、増えてきていることに、ゲームがしたいから、動画が観たいから学校へ行きたくないという児童がいます。ゲームをしたいから学校へ行きたくない」という言葉は、子どもなりのSOS や防衛反応であることがほとんどです。本当は学校で何かしんどいこと・不安なことがあるものの、それをうまく言語化できなかったり、親に心配をかけたくなかったりして、一番わかりやすい「ゲーム」を理由に挙げているケースが多く見られます。親として取るべき対応を、基本の姿勢から具体的なステップまでまとめました。

1 まず知っておきたい「ゲームが果たしている役割」

不登校や登校渋りの子どもにとって、ゲームは単なる遊びではなく「心の避難場所」になっています。

現実逃避（心の休息）：学校に行けない罪悪感や不安を一時的に忘れられる時間です。

自己肯定感の回復：現実では「できない」「ダメだ」と感じていても、ゲームの中では「クリアできた」「仲間の役に立てた」という達成感を得られます。

社会とのつながり：オンラインゲーム上の会話が、外の世界とつながる唯一の細い糸になっていることもあります。

2 やってはいけない NG 対応

心配のあまり良かれと思ってやりがちですが、状況を悪化させやすい対応です。

●いきなりゲーム機やスマホを取り上げる・全面禁止にする

心の避難場所を突然奪われるとパニックや強い反発を招き、親子関係が壊れてしまいます。取り上げても勉強や登校には向かわず、無気力になるケースがほとんどです。

●「ゲームをやめたら学校に行きなさい」と交換条件にする

学校へ行くプレッシャーと結びつけると、子どもの心の負担がさらに重くなります。

●感情的に叱り続ける・原因を問い詰める

「なんで行けないの？」「ゲームばかりして！」と責められるほど、子どもは「自分はダメだ」と感じてさらにゲームの世界に閉じこもります。

3 親としての具体的な対応ステップ

ステップ①まずは「安心感」と「居場所」を作る

制限やルールの話をする前に、家が「責められない安全な場所」であることを伝えます。

ステップ②ルールは「禁止」ではなく「生活リズムを守る枠組み」として一緒に決める

子どもが少し落ち着いてきたら、ゲームをしていない機嫌の良い時間帯に話し合います。

〇何時間まで」より「何時に区切るか」で決める：「夜は◯時になったらコントローラーを置く」「食事中はスマホを離す」など、生活の区切りと紐づける方が守りやすく、昼夜逆転を防げます。

〇子ども自身に決めさせる：親が一方的に押し付けるのではなく、「何時までなら守れそう？」と本人に決めさせることで納得感が生まれます。

〇安全面だけは別枠で約束する：課金の上限や、ネット上で個人情報を教えないことは、家族を守るルールとして明確に伝えます。

4 抱え込まずに外部の力を借りる　まずは学校へ相談して下さい!!

保護者だけで抱え込むと、どうしても視野が狭くなり、お互いにつらくなってしまいます。学校の「いなほ教室」や保健室、学校に配置しているスクールカウンセラー（SC）や市教育支援センター（ハート教室）などの活用も視野に入れる。

※「いなほ教室」：登校はできるが、教室へ入ることが難しい児童が安心して過ごせる教室です。

※「ハート教室」：南城市教育委員会が設置している教室で、学校への登校が難しい児童が安心して学習できる教室です。

